

ドストエフスキイと自殺 — 『おとなしい女』をめぐって

秦野 一 宏

「伝染病はますます蔓延していった。世界中で難をのがれたのはわずか数人だけだった。それは新種族と新生活の原初となり、地上を更新し浄化する使命を帯びた純粋な、選ばれた人々であった」（『罪と罰』エピソード、ラスコーリニコフの夢より）

1. 二つの「傲岸さ *гордость*」

『わがドストイェフスキイ』という著書の中で、河上徹太郎氏は『おとなしい女』を次のように分かりやすくまとめている。「この小説の主人公の男は、一言でいへばえげつない中年男〔41歳〕である。そして女〔16歳〕は情愛不感症的な面白みのない女である。男は女を愛したつもりでをり、女は男を愛さうとし、ともにその意図を果さない。そして当然来るべき悲劇のキャタストロフ〔妻の自殺〕が来て見ると、この悲劇が永遠の男女闘争の宿命的な型をなしてゐることが明らかにされる。さういつた心理小説である¹」。「おとなしい女（クロトカヤ²）」が「情愛不感症的な面白みのない女」であるどうかはしばらく措くとして、物語が二人の精神的な「闘争」を扱っていることは疑いない。ただいったい彼らはなぜ闘争するのだろうか。ドストエフスキイが残した手書き草稿には男のこんな言葉が記されている。「わかってくれ。我々はお互い不可能なものを求め合ってきた。私はヒポコンデリーで、おまえは直情径行だ。なんのためにお互いを苦しめあうのか³」。二人が争いあうのは、性格が違い、相手に求める愛情も違うことに原因がある、というのだ。この草稿の質屋の言葉を敷衍

すれば、二人の闘争は河上氏の言うように「永遠の男女闘争の宿命的な型」であって、お互いが悪いということになる。ただ最終稿を読むと、質屋自身、考えが定まっておらず、相手が一方的に悪いと責める時があれば、二人とも悪くないと弁明する時もある。自分が悪いと認める時もある。

相手が悪いと言う時の男の言い分はこうである。16歳の若い妻は自分の体験した、口に出せない塗炭の苦しみをまったく理解してくれなかった。「そこにあるのは直情径行と人生についての無知と若者の安っぽい信念、『美しい心』の夜盲症だ。ここで肝心なのは金貸しで、これでもう万事休す！（…）おお、地上の真実とはなんと恐ろしいんだ！ この魅惑的なおとなしい女、この青空のような女—彼女が暴君、わたしの心の耐えがたい暴君で、迫害者であったのだ！ もしこれを言わなければ、わたしは自分を誹謗することになる！⁴」。妻は口をきかず、男も言い訳めいたことをしゃべりたくない。その状態を男は *гордое молчание*（=傲慢な沈黙）と呼ぶ。彼は、自分は妻に対しては *гордость*（=誇り）をもって行動していたと言い、*гордый человек*（=誇りある人間、傲慢な人間）として口をきかなかつたのだと言う。自身が悪いと考える時にも、彼は自分の「悪鬼のような」*гордость*（=自尊心、傲慢さ）に言及している。物語そのものが質屋の回想であるため、クロトカヤ自身の視点は欠落しているが、下女として働いていたルケーリヤも質屋と同じく、クロトカヤのことを「*гордая*（=気位の高い方）」であると証言している。ルケーリヤはずっと以前からクロトカヤの身近にいたので、この言葉はきわめて信憑性が高い。

このように見てくると、どうやら二人の性格の大きな特徴は *гордость* にあり、それがぶつかりあって「闘争」になったと言えそう。とはいえ、質屋とクロトカヤに共通するもの、それは「ロシア正教に死をもってしか贖えない罪と定められた倨傲、利己的な自尊心である⁵」というジダーノフ氏の指摘を受け入れるには

ためらいがある。若い自殺者に、「かわいそうな娘よ、おまえの死を悼んで泣きわめいたりはしないけれど、せめておまえを憐れませておくれ、それだけは許してほしい⁶」と、やさしい言葉で語りかけ、自殺者たちには博愛心をもって接するべきだと主張しているドストエフスキイの当時の文章（『作家の日記』）を読めば、彼がクロトカヤの自殺をキリスト者の罪として断罪しているとはとても思えない。氏の言う「倨傲、利己的な自尊心」とは гордость のことであるが、ほんとうに質屋とクロトカヤの гордость は同じものであったのだろうか。まったく同じものがぶつかりあったのであれば、二人は客観的に見て、お互いに悪かったと見なせるかもしれないけれども。

ロシア語の г о р д о с т ь という言葉は、「誇り、自尊心」という肯定的な意味と「高慢、傲慢」という否定的な意味を併せもっている。その両方の意味を兼ね備えた日本語は厳密に言えばないのかもしれないが、原語になるべく近いニュアンスをもつ日本語として今仮に「傲岸さ」という訳語をあてる。そして、当時、ドストエフスキイがどのようにこの гордость という言葉を使っていたのか、その用法を見るために、『おとなしい女』と同じ年に書かれた『作家の日記』の中の一文を訳してみよう。

「[ジョルジュ・サンドの若い女主人公たちにあっては]思いやり、忍耐、義務意識の間には、問い質しと抗議の極度の傲岸さも現れていたが、この傲岸さこそ貴重なものだったのである。というのもそれは、最高の正義、これなくしては人類が精神的な高みに立つことのできないような正義に由来するものだからだ。(…) この傲岸さはまた、俺はおまえより優れている、おまえはおれより劣っているということから来る敵意ではなく、ただ不正や悪徳となじむことのできないもつとも潔癖な感情 целомудрие である。とはいえ、繰り返しになるが、この感情は大いなる寛容とも、思いやりをも排除するものではない。のみならず、この傲岸さに応じ

て、絶大な義務をみずから自分にも負わせている。これらの女主人公たちは、犠牲と功業を渴望していたのだ？」

『おとなしい女』でも、質屋とクロトカヤにおいて、ここで言われる二つの「倣岸さ」が示されているのではないか。質屋自身は自分のことを「寛大さ」をもつ「誇り高い」人間と考えていたが、それは彼が空想の中で自分を美しく飾りつけたかっただけである。また、質屋がクロトカヤのことを時に「心の耐えがたい暴君」、「迫害者」と呼ぶのは、相手の「倣岸さ」を誤解しているからである。質屋は、クロトカヤが自分に対して強く反抗するのを見て、彼女を傲慢だと断じたけれど、その彼にしても、非難の矢が自分に向けられていない時には、彼女の反抗的な態度を違ったふうに解釈する。たとえばクロトカヤと将校時代の同僚エフィーモヴィチの密会でのやりとりを盗み聞きしていた時には、相手を攻撃するクロトカヤの辛辣な言葉に「悪徳に対する美德の聖なる軽蔑」を見てとり、「弾劾」のなかにも「真実」があったと、率直な感想を述べている。また、自分自身との関係をふり返り、見せかけの愛に応ずるには彼女は「あまりにも潔癖すぎた、あまりにも純粹すぎた」と、ふと洩らすこともある。とはいえ、これらはみな、あくまで彼の自尊心が傷つかない限りにおける考えである。誰かの指弾する指を感じ、自己を正当化しようとする時の質屋はじつに雄弁であり、その言葉の力に圧倒されて、ややもすると読者は、クロトカヤを迫害者に見立てるような見方に同調してしまう。その結果、細部を読み落とし、クロトカヤを「情愛不感症的な面白みのない女」と見なしてしまったり、お互いが悪いというような喧嘩両成敗的結論に達してしまったりするのである。『おとなしい女』を読み解くにあたっては、雄弁に惑わされることなく、二つの倣岸さの意味の差を十分に認識しておく必要がある。

質屋のもっている倣岸さ（＝傲慢）は、地下室人やラスコーリニコフたちにも通じるもので、その本質は引用文にもあるように、

自分は人よりも優っている、あるいは劣っているという感情に根ざした、人々に対する強烈な敵対感情の表れである。彼らのもつ劣等感と優越感は同じコインの裏と表のようなものだ。彼らは、自分は人々から極度に低く扱われていると感じている。被害妄想的に、自分は悪くないのにみんなから傷つけられている、社会の隅に追いやられていると強く感じている。と同時に、その負の感情をはね返すかのように、ほんとうは自分は他の人々よりもはるか上にいるという誇大妄想的な意識をもつ。たとえば質屋は、自分は重苦しい性格と「おかしな(=滑稽な)」性格のために人から嫌われていると感じていても、もう一方では「崇拜の対象」が仲間の物笑いの種になることは珍しくないことだと考えているのである。質屋がいかに傲慢であったか、具体的に見てゆこう。

質屋は将校として騎兵隊に勤務していたが、ある時決闘を忌避したというので臆病者のレッテルを貼られ、将校連の決議により連隊を去ることになる。民間の勤め先に勤めることもできたが、「輝かしい制服」を着たあとでは見栄えの悪い会社に勤めたくはなかった(これもある種の傲慢である)。そのあと3年間、墮ちるならどん底まで墮ちろと、ペテルブルグの街を浮浪人のようにうろついて、どや街にも住み、物乞いまでした。1年半前、教母であった金持ちの老婦人が死んで3千ルーブルの遺産が入った時点で、男はその金を元手に金貸し業をはじめた。その理由は彼の言葉によればこうなる。

「あなたたちはわたしを排斥した。人々即ちあなたたちは軽蔑的な沈黙をもってわたしを追放した。わたしの燃えるような熱意に対し、あなたたちは生涯にわたる侮蔑で答えた。したがって、今やわたしはあなたたちを隔てる壁を作り、3万ルーブルを貯めて、その金でどこかクリミア南海岸あたりの山のぶどう園に自分の領地を買い、そこで余生を終える権利をもっている。大事ななのは、あなたたちから離れてもあなたたちには悪意を抱かず、心に理想

をもち、心から愛する女性と、もし神が授けるなら家族を持って、近隣の農民を助けながら暮らすことである」

悠々と余生を送るのに必要な3万ルーブルを貯めるために質店を営んでいるが、それは侮辱を受けた自分の当然の「権利」であるという。「したがって」貧しい者からどれだけの金を巻き上げようと、彼の責任にはならない。自分には「権利」だけがあればいいので、侮辱の罪は「人々の中でもっとも心の広い人間」として赦してやる……。いかにも驕った態度である。人々への「燃えるような」熱意があったのに裏切られたというのも、人々に悪意を抱かず、心に理想をもって暮らすというのみな、自分を高みに置くために作り出した虚構であり、空想である。そして質屋自身も、「人々」からそのように見られるかもしれないことを意識し、恐れてもいる。だからこそ「心から愛する女性」を現実から持ってきて、空想の現実化を図る必要があったのだ。ここで注意しておかなければならないのは、彼の考える「愛」の意味である。

他の人々に対するのと同様、彼が妻との関係において強く望むのは、自分を上、相手を下に置いた上下関係である。彼の求める理想的な「愛」とは、相手に暴君のようにふるまう権利である。しかもその権利は「自発的に」捧げられてこそ価値があるので、権利を得るための闘争が終わり相手が精神的に征服されてしまえば、その後は、心置きなくこちらがへりくだる。相手は暴君のへりくだる姿を見て、その「寛大さ」に感動し、いっそう崇拜の念を高めるだろう、と見込んでのことだ。こうして質屋の考える「愛」は成就し、「心から愛する女性」は完成する。これはまさに「システム」としての「愛する女性」育成計画であり、この計画がじっさいに生身の女性に適用されるとなると、当然のことながら、ある種の暴力的行為にならざるをえない。質屋に言わせれば、<正しい>目的のために「システム」が作られているのであれば、どんな暴力も許されるということになるのだろう。今仮に百歩譲って、

質屋の目的が正しいものであったとしよう。しかし、たとえ正しい目的のためだったとしても、暴力そのものが孕む倫理の問題が残っている⁸。人を傷つけ無化すること以上の意味を暴力はもっているのだ。レヴィナスの指摘するように、暴力の本質はむしろ「人格の連続性を中断させ、そこに自分を見出すことがもはや不可能であるような役割をひとびとに演じさせることにある⁹」。質屋は、「心から愛する女性」のために「樂園」を約束するが、その樂園で安穩と暮らせるのは固有の実体のない生ける屍だけであろう。

この「心から愛する女性」という鑄型に当てはめる候補として選ばれたのがクロトカヤである。自殺という想定外の出来事が起きてしまって「愛する女性」の育成計画は頓挫してしまっただが、自殺の2時間前クロトカヤが自らやって来て、彼に手を合わせて「忠実な妻になります。これからあなたを尊敬します」と申し出たその時点までは、まさに質屋の〈傲慢な〉計画の枠内でことが運ばれているように見えた。「クロトカヤ」をめぐる質屋の回想は、ある面から見れば、周到に練られた自分の計画がなぜ失敗に終わったのか、その原因をつきとめるための作業である。

結婚が決まると、クロトカヤは自分の気持ちを抑えられず、いきなり「愛情」をもって夫の懐に飛びこんでいった。しかし、自分たちは絶対的に「違うもの *разница*」であると考えた質屋には、対等を前提としたそんな無邪気な、直接的な愛情はとうてい受け入れられるものではなかった。自身の忌まわしい過去も、相手が自分を尊敬するようになるまではおいそれと口にするわけにはいかない。クロトカヤは理想の妻になる第一歩として、彼の思い通りになるように「心の広さ」を「植えつけられ」なければならない。草稿に残された言葉を用いていえば、彼女の「性格」は徹底的に「再教育」される必要があったのだ¹⁰。

とはいえ、クロトカヤは彼の思惑通りにうまく再教育されない。

表面はおとなしく見えるクロトカヤにも、嘘や不正への抵抗においては、質屋から見れば「迫害者」に見えるほどの傲岸さがあったからだ。この傲岸さを特徴づけるのは、なによりも彼女の大きな目である。結婚すると質屋は再教育の一環として、相手が金貸しという商売を軽蔑しないように、ことあるごとに金、金と妻に金のありがたみを強調したが、彼女は「大きな目を開き、耳を傾けて」黙って夫を見ている。それは相手を問い詰め、抗議する目である。かつて質屋から、「どんな人生の舞台でも、よいことはできる」と言われ、その言葉を信じきって結婚に踏み切ったにもかかわらず¹¹、「よいこと」は何もしていないし、また、できそうにない。生活費をどんなに切り詰められても耐えてゆけるが、捧げるべき犠牲と功業がどこにもないとなれば、話は違う。傲岸なる「潔癖さ целомудрие」をもった彼女は、どんな嘘や不誠実にも耐えられないのだ（クロトカヤの「潔癖」な性格は、質屋も認めていたが、彼はそれを若者一般に共通する「安っぽい」ものだと考えていた）。俺は中傷され、犠牲ばかり多い、一しづくの榮譽もない「功業」に携わっているのだ、と夫から言われた時は、クロトカヤはたいへんな勢いで抗弁した。質屋は伝えてはいないが、おそらく、今の生活のどこに「功業」があるのかと反論したにちがいない。しかし相手はまったく聞く耳を持たない。彼女はしだいに黙り込み、問い詰めるような「注意を凝らした大きな目」で夫を見返すようになる。

ある日、いっこうに「よいこと」をしない夫の態度に業を煮やしたクロトカヤは、どんな場所でも善行は可能だという自身の考えを実行に移そうとする。自分の判断で質草を値打ち以上に値踏みし、金を貸し付けたのだ。それが原因で、夫と言い合いになり、さらには大尉の後家の老婆から預かっていた質草を独断で、より値打ちのない質草と交換してやったことで、夫からきつく叱責されることになる。質屋は彼女の非を断固たる調子で説明し、最後には穏やかにこう言い放った。金はわたしのものだ。わたしは自

分の目で人生を見る「権利」をもっている。そして、おまえを家に招き入れた時に、「何一つ隠さなかった」はずだ、と。クロトカヤはその言葉を聞いて「野獣のように」地団太を踏む。すべての「権利」は夫の側だけにあって、妻である自分にはない。絶対的な権力の下で、やみがたい善への希求はねじ伏せられ、自分がよしとする行動も禁じられている。行動の自由どころか、自分の目で人生を見ることすらままならない。精神的服従まで強制されるとなれば、それはもう奴隷以下である¹²。とはいえ、これで彼女の抵抗、問い質しが止むわけではない。その後、本当に何も隠していないのかどうか、クロトカヤは夫の過去を自力で調べはじめる。そして夫が話さなかった、臆病風に吹かれて決闘しなかったために連隊を追放されたという<屈辱的な>過去を聞きつけ、夫にことの真偽を確認する。彼は自分に非はないと、あれこれと弁を弄して説明するが、なぜ隠していたかという問いかけには頑として答えない。夫の弁解に納得ゆかない彼女は、自分で確かめるために、大胆にも昔の彼を知る将校仲間と逢引までする。二人の密会はしかしながら、事前に夫に知られてしまう。夫は密会に行くクロトカヤを止めるのではなく、先回りして待ち合わせ場所に赴き、二人の会話を盗み聞きしたあと、彼女をその場から家に連れ戻す。その夜、彼は妻が手にとることができるように故意にピストルをテーブルの上に置いて寝る（死を怖がっていない、臆病ではないことを示したかったのだろう）。そして夜中になると、夫がほんとうに臆病でないのかどうかを確かめようとしたのだろう、クロトカヤはそのピストルを手に取り夫のそばにやってきて、寝ている彼のこめかみに押し当てる。一暴走ともとれる行為の連続だ。質屋がそそのかしているところもあるけれども、どれも彼女の度外れの「傲岸さ」のなせるわざである。そしてその傲岸さは、夫の「悪鬼のような傲岸さ」に真正面から異を唱えるものであった。すでに見たように、ドストエフスキイはこの種の「問い質しと抗議」の「極度の傲岸さ」が、人間を支える「最高の正義」に

由来すると考えていた¹³。聖像を抱えての自殺は最終的に、クロトカヤが自身の〈聖なるもの〉を守りぬき、質屋の暴力に屈しなかったことを物語っている。計画はクロトカヤという現実の凄絶な、ものいわぬ(「おとなしい」)抵抗によって崩れ去ってしまったのである。

とはいえ、いくら重要だとはいっても、『クロトカヤ』という物語の解明は、二人の傲岸さの「闘争」と図式化して能事畢るといふわけにはいかない。善悪の「闘争」がすべてであれば、作者は三人称形式でクロトカヤを実際に登場させただろうし、質屋による回想という手の込んだ形式をとることもなかっただろう。何がクロトカヤを死に追いやったか。—これがドストエフスキイの問いかけであり、視座である。質屋の傲慢さだという答えは大枠では間違っていないとはいえ、それだけではものたらない。

2. 現実と空想

自身の計画の頓挫を検証することが、質屋にとって「回想」の最大の目的であったとしても、作者と読者のチャンネルを通して伝えられるのは、それだけではない。

質屋は金を貯めて、クリミアの南海岸のぶどう園にひきこもる計画を立てていたが、〈妻〉は質屋にとって、将来の計画のために必要な、しかし取替え可能なモノであった。16歳に満たない「おとなしい」少女で、3年前に両親はすでに死んでいる。父親は官吏であったが、書記上がりの一代理貴族で、世襲貴族の自分より身分が低い。今は叔母たちのところで奴隷的な扱いを受けている。そうしたことすべてが質屋には結婚相手として「手ごろ」に見えた。このように、結婚を自身の計画実現のための手段とするのは、質屋に限ったことではない。たとえばチャーホフに『すぐり』という小説があるが、そこで語られるニコライ・イワーヌイチという官吏は、都会の喧騒を離れ、すぐりの植わった自分の持ち村を

もつことを長年夢見ていた。この夢を実現するために彼はつゆほどの愛情もなく、年とった、器量の悪い未亡人と結婚した。それは、その女が、彼の計画に利用できる金を貯めこんでいたからである。女は金をすべて吸い取られ、黒パンさえ満足に与えられない強いられた極貧生活の中で、やせ衰えて死んでしまう。しかしそれでも男は彼女の死が自分のせいだとは一時も考えたことがなかった。— ニコライ・イワーヌィチにとっても、金を持っている〈妻〉は手ごろであったのだ。ただ、質屋がチェーフの官吏と決定的に違うのは、妻の死に心が激しく動揺していることである。クロトカヤが死ねば、その代わりに新たに「心から愛する女性」を作ればそれですむはずなのだが、彼女の死とともに、クリミアのぶどう園にひきこもって優雅な生活を送るといふ人生の計画そのものが瓦解してしまった。クロトカヤと暮らすうちに、いつしか計画とクロトカヤの価値が逆転してしまっていたのである。

小説の構想を練るためにドストエフスキイが書いた 1874 年から 1879 年のメモ書きの中に、こんな話がある。嘘をつきながら空想の世界に住むことに嫌気がさした男が「現実的なもの」がほしくて、ある子どもの「救世主」になった。最初は無理をして演技をしていたが、そのうちに「直接的に」その子を愛することができるようになり、これで新しい生活をはじめられると喜ぶ。しかし男は自分を飾ることがどうしてもやめられず、またもや（子どもについても）あれこれと空想に耽り始める¹⁴。この話は、『おとなしい女』と似ている。空想家の質屋もまた「現実的なもの」を求め、自己を救世主になぞらえてクロトカヤと結婚した。そして彼も、知らずしらずのうちにクロトカヤをいとおしく思うようになってしまったのである。あいかわらず空想家でありつづけはしたけれど、ある種の情愛を感じたことはたしかである。でなければ、彼はクロトカヤの死に衝撃を受けることはなかっただろう。

いかに彼が動揺しているか、それはすでに物語の冒頭において

示されている。「……彼女がここにいる間は、まだいい。近寄っていつだって見ることができるのだから。しかし明日、運ばれてしまったら、わたしはどんなふうにも一人取り残されるのだろう」。以後、テーブルの上に横たえられている自殺した妻の傍らで、なぜこんな事態になったのか、そのわけを自身に解き明かそうと、二人の出会いから妻の自殺までを男は回想するのだが、この一節は極めて重要である。たとえ相手が死んでいても、身体がそこにある限りずっとそばにいつづきたいという切実な思いがそこにはある。彼は恐ろしい孤独感に苛まれている。「愛する女性」の育成を計画している質屋が、「愛」という言葉をどれほど感情をこめて口にしようと信用が置けないけれど、彼の感じているこの孤独感こそまさに、彼にとってクロトカヤがかけがえのないものになっていた証しにはなる。

クロトカヤを「直接的に」愛した証しだとは言わない。あるいは一度は「直接的に」愛したこともあったのかもしれないが、クロトカヤの死によって質屋の感じた衝撃には、さらなる注釈が必要だろう。重要なことは、彼にとって「見ることができる」ということには特別な意味があるということだ。先ほどの子どもを愛した男が、再び空想に奔ってしまったように、質屋もクロトカヤに自身のお好みの〈衣服〉を着せて、新たな空想をはじめるのである。「直接的な」愛は彼らにとって空想の妨げにはならない。というより、愛する者についての空想は、現実よりもはるかに甘美なものであったのだ。質屋の場合、クロトカヤの消滅は同時に、〈衣服〉を着せるべき本体の消滅でもあった。

質屋は、逢引きしたことや夫に銃口を向けたことで、クロトカヤが冬の間ずっと罪の意識に苛まれつづけていることを十分承知しながら、まったく声をかけることなく過ごすことができた。それは、逢引き事件やピストル事件を含め、自身の空想に利用できる「場面と素材 картины и материалы」があり余るほどあったからだ。甘美な空想に勤しみながら、彼女はすぐそばにいるのだ

から和解は簡単だ、ぎりぎりまで「待ってくれるだろう」と高を括っていたのである。彼は自分自身を「わざと」たきつけて相手を忌々しく思えるようにもってゆき、大詰めの到来を遅らせた。一方クロトカヤは、一冬の間、相手が沈黙を守りつづけたことから、婚姻関係は事実上破棄され、二人はずっとこのまま他人同士の間柄で暮らしてゆくのだと思いこむ。4月になって、彼女が夫である自分を意識せず歌をうたっているのに気づいた時は、質屋もさすがに事態の深刻さに驚いて、「話をしよう」と近づいていった。かねてより考えていた通り、へりくだって足に接吻し、「愛する女性」を作り上げるための総仕上げを急ごうとする。相手はしかし、彼の期待していたような反応を示さず、「あなたはわたしをそのまま、放っておいてくれるだろうと思っていました」と、思いもよらぬ言葉を返してきた。この言葉に肺腑をえぐられるような思いに駆られはしたが、それでも彼は希望を抱きつづける。不幸な事態の兆候が見えていても信じない。なぜならば、「彼女が傍らに、自分の目の前にいる」からである。彼はさらに、目の前の彼女を材料にして空想の羽をのばす。これまで稼いできた金を全部貧しい人たちに分け与えると告げれば、その心の広さに胸を打たれて彼女も感激し、「誤解」もたちまち氷解するだろう。そう考えて、質屋は二人が仲むつまじく「新しい勤労生活」を送っている様子を思い描く。

つまり、彼はたしかにクロトカヤをかけがえのないものとしていとおしく思っているが、そのクロトカヤはあくまで現実から素材を取った、空想の中の<クロトカヤ>だったということだ。クロトカヤはそのずれを察知し、一度は相手の空想に合わせて<クロトカヤ>を演じようとするが、結局は演技を拒み、自分自身であることをよしとした。固有の実体であることを優先させ、自殺を選択したのである。

ところで素材といえ、たとえ遺体であっても、それが現実のクロトカヤであるかぎり、空想に利用できるのではないか。おそ

らくここに男の回想の出発点がある。質屋は傍らの遺体を見ながら、自分に責任を負わせないストーリーを作り出そうとしたのである。

クロトカヤを死に追いやったのは自分だという罪悪感と、それを認めたくない意識とがせめぎあう。なぜ、自分が孤独感に襲われるのか、回想をはじめた時点では、自身の感情が説明できない。あるいは心の中で分かっているのかもしれないが、そのことをはっきりと意識化することへの恐怖感がある(「自分がすべてを分かっていることがまた、わたしの恐怖なのだ」)。自分のこれまでの生き方そのものを否定してしまうようなことを認めたくない、という頑強な内なる抵抗がある。彼は裁判を想定し、自身に被告と弁護人の役割を割り当て、<美しい>空想物語を利用して自己の正当化を計ろうとする。検事と裁判官は、彼が「あなたがた」と呼びかける想像上の聴き手である。

被告は無罪を申し出る。回想の前半部分では、質屋は罪悪感に苛まれながらも、弁護人として検事と論争し、悪いのは妻自身であったと主張した。大きな広い心を持っている「誇り高い」男と、その心を理解できず自ら死を選んでしまった「傲慢な」女のストーリーが弁護人としての彼の後ろ盾となる。「かまやしない。本当のことを言おう。真実の前に面と向かって立つことをわたしは恐れない。彼女が悪いのだ、彼女が悪いのだ!」。相手がわたしを理解してくれなかったのが悪い。— この問題の処理の仕方は、連隊から追放される原因となったかつての決闘事件を思い起こさせる。袋小路に追い込まれた時の彼の常套的な現実対処法だ。ひと言でいえば、自分はむしろ被害者で、非はこちらの「燃えるような熱意」を理解せず、自分を迫害した相手側にこそある、というのである。彼はどこまでも自分の創作した空想物語の颯爽とした主人公になりきろうとする。

ただ、ドストエフスキイにあってはよくあることだが、自ずから湧き上がる記憶は、自身の思い通りにはならない¹⁵。

後半（第2章）に差し掛かってくると、＜弁護士＞の形勢は悪くなる。序文にあるように、「彼によって呼び起こされた一連の思い出は、否応なしに彼を最終的に真実へと導いてゆく」。自分についていた＜嘘＞が見えてきて、自身の「傲岸さ」が「悪鬼のような」ものであったと意識される時が来る。

「……なぜ彼女は死んだのか。依然として問題は残る。問題は脈打っている、わたしの脳内で脈打っている。彼女があのみまであるように望むのならば、あのみまにしておいてやったものを。彼女はそれを信じなかった。ここに問題があるのだ！ いやいや、わたしは嘘をついている、そんなことではないんだ。わたしにただ誠実でなければならなかつただけなのだ。愛するということは、つまりは全面的に愛するということで、あの商人を愛するようないかにはいかない。彼女は商人に必要な愛で折り合うにはあまりにも潔癖で、あまりにも純粋であったので、わたしに対しても騙したくはなかつた。模造品の半分の愛や四分の一の愛で欺きたくはなかつた。どこまでも誠実であること、それが問題だつたってわけでございますね！（вот что-с!）」

質屋はクロトカヤが、夫を愛することにおいて「潔癖」で「純粋」であったことは認める。とはいえ、まだ自分の非を認めたわけではない。問題は自分ではなく、彼女の側にあるという考えはここでも変わらない。さらに引用の最後のへりくだりを示す助詞の-c（スロヴォイエルス）が現れることで、おどけの意が加わり、それまでの言葉の重みも半減する。彼は依然、自身の罪を真摯に受けとめていない。この先も、クロトカヤが死んだのは「偶然」で、「もう少しの言葉」と「2、3日」の時間さえあれば、彼女は自分の「心の広さ」を理解してくれ、「誤解」は解けていたと考えるのである。しかし、彼女が運ばれ、ここにいなくなった時の孤独に再度思いが至ると突然、「自分が彼女を苦しめた」のだと知る

ことになる。「悪鬼のような」傲岸さは影をひそめたけれども、それでもまだ、傲岸さそのものは捨てきれない。彼は責任をかわすために、自分がどんな樂園で彼女を取り囲もうとしていたか、もしも今、彼女の目が開けば、「すべてわかってくれるだろう」と、ありえない非現実の世界に逃げ込もうとする。クロトカヤを前にしての最後の空想だ。「いやほんとうに、彼女が明日、運ばれてしまったら、わたしはいったい何をするのか？」という、クロトカヤの不在を想像する言葉で回想は締めくくられるが、ここではじめて彼は現実と向き合う。彼女が運ばれてしまえば、もはや空想はできなくなり、時計が刻む味気ない物理的な時間だけが過ぎてゆくことを知る。もちろん、クロトカヤのことをよく知っているルケーリヤに話を聞くことはできる（「こうなったらどんなことがあっても、ルケーリヤを放しはしない」）。しかし、ルケーリヤが語ってくれる話はもはや彼の＜美しい＞空想の素材にはなりえないだろう。彼女の言葉はすべて過去についてのもので、彼に活力を与えてくれる目に見える現実そのものではないからだ。

3. 「あなたがた」と読者

もう一つ、考えておかねばならない因子がある。それは、質屋が検事、裁判官として常に意識し、「あなたがた」、「みなさん」と呼びかけている彼の想像上の「人々」である。「みなさん、ちょっと待っていただきたい。わたしは生涯、この金貸し業をだれよりも憎んできた」。「もし人を裁くのであれば、事情を知って裁くべきだ……お聞きください」。「あなたがた、世間の人々は、軽蔑的な沈黙をもってわたしを追放した。あなたがたに対するわたしの燃えるような熱意に対して、あなたがたはわたしの生涯にわたる侮辱で答えた」等々。決闘事件にからんで連隊から自分を追い出した将校連が、この「あなたがた」、「人々」のイメージを特徴づけているが、それだけではなく彼は、自分の非をあげつらう世間

の不特定多数の人々すべてを「あなたがた」に含めている。

世間の人々は自分をどのように思うだろうか、質屋には彼らの下す評価が気になってしかたがない。時には気にかけるあまり、すでに触れた助詞の-c(スロヴォイエルス)を用いることで、「あなたがた」の心をくすぐることさえある¹⁶。—「ここで肝心なのは金貸し業ということなのだ。お許しを願って一つ申し述べさせていただきますのだが(Позвольте-c)、女、それもまだ16歳の女なんてものは、男に完全に服従せざるをえないってことをわたしは知っていた」。

なぜ質屋はこれほどまでに、「人々」にこだわるのか。それは、いかにミザントロープを気取ろうとも、彼は人々とともに生きていかざるを得ないからである。人々からは逃れられない、臍の緒はつながっている。地下室人が手記の最後で、これまで「あなたがた」と呼びかけていた人々を、「われわれ」と呼び変えて両者の違いを否定しているのは興味深い。自分は人々が徹底する勇気がなかったことを、極限まで徹底しただけで、「わたし」も「人々」も本質的には違いがないというのだ¹⁷。「われわれ」には準拠するものがない。もし書物がなかったら、「われわれはすぐにまごつき、途方にくれるだろう。何を愛すべきか何を憎むべきか、何を尊敬し何を軽蔑すべきか、どこに加わり、何に従うべきか、わからなくなるだろう」と彼は言う¹⁸。クロトカヤを回想することで、質屋もこの地下室人と同じように考えるようになる。つまり「あなたがた」にも自分にも、抛りどころとすべき確固としたものがないという認識をもつのだ。

質屋はこれまでずっと、クロトカヤはいわば人々の代表者であり、この代表者を「征服する」ことによって、自分は過去の汚名をすすぐだけでなく、人々に対して優位に立つことができると思っていた。クロトカヤを「心の耐えがたい迫害者」だと見なした時も、質屋は彼女を「あなたがた」の側に分類した。どんな時も、「あなたがた」は常に自分の向かい側にいると考えていた。しか

し、クロトカヤが自分にとってかけがえのない者であるとわかり、自分がクロトカヤを「苦しめた」のだと思い至るや、彼の考えは反転する。クロトカヤは自分と「あなたがた」の向こう側にいる人間であり、クロトカヤを前にすると、自分と人々は「われわれ」となってしまう。異質なのは準拠すべき<聖なるもの>をもったクロトカヤであり、<聖なるもの>をもたない自分と人々は、本質的に変わるところがないことが突然分かるのだ。彼は、自身が「人々」から受け入れた愚かさが、クロトカヤがもっていた誠実さや潔癖さ（<聖なるもの>）を打ち砕いたことを知った。クロトカヤがこの世界から持ち去った「聖像」はまさに、<聖なるもの>のシンボルとなっている。

クロトカヤを破滅させた愚かさは、質屋の言う「因循姑息な精神」と重なる。

「今となっては、あんたがたの法などわたしにとって何だというのか？ あんたがたのしきたり、あんたがたの風習、あんたがたの生活、あんたがたの国家、あんたがたの信仰が何の役に立つのか？ 裁判官にわたしを裁かせるがいい。わたしを法廷に、あんたがたの公開法廷に引っ張り出すがいい。そしたらわたしは、何も認めないと言ってやる。裁判官は叫ぶだろう。『お黙りなさい、将校！』と。わたしは叫んでやる。『今、わたしを従わせるだけの力があんたにあるというのか？ なんて暗澹たる因循姑息な精神がなにより大切なものを打ち砕いたのか？ 今となっては、あんたがたの法がわたしにとって何になる？ わたしは縁を切ってやる』。おお、わたしにはどうだっていいんだ！」

ジダーノフ氏はこの個所の「因循姑息な精神 *косность*」を、「他者に対して心を開き切ること」ができないために惰性的無気力におちこまざるをえない社会の「疾病」だと解釈して、クロトカヤもその病に罹っているとみなす¹⁹。すでに触れたように、氏は彼

女のなかに、人間の相互理解を阻むものとして質屋に負けないくらい「倨傲、利己的な自尊心」を見出しているのだ。しかし、そのような見方に立つと、質屋がなぜここで「裁判官」を「あんた ты」と呼び、「あなたがた」ならぬ「あんたがた」に激しい怒りをぶつけているのか、理解できなくなる。結婚が決まり嫁いでくる前に、クロトカヤが質屋の懐に飛びこんできて心を開ききつたことは、夫である質屋自身が証言しているのではないか²⁰。心を開かなかったのは質屋の側だけだ。社会を断罪する今の彼からすれば、心を閉ざしつづけたのは嫁としてしつけようと、「あんたがたのしきたり、あんたがたの風習」に従っただけだということになるのだろう。相手を理解しようとしないうかさ「疾病」と名づけるのはいい。その「疾病」はおそらくは伝染病であろう。そしてその「疾病」を免れていた純粋なクロトカヤを、自身の精神的な生みの親（感染源）たる「あなたがた」が打ち砕いたと質屋は考えた。だからこそ彼は、「あなたがた」と縁を切ると宣言しているのである。

かつて質屋は、クロトカヤを若い女性によくあるタイプと見なし、彼女に「独自性」などはないと嘯いていたけれども、独自性がないのは彼の方であった。質屋は「あんたがた」の「法」や「しきたり」を規範とし、「因循姑息な精神」に則って行動してきた。そしてその結果、彼の行動がクロトカヤを「苦しめ」、死に至らしめることになったのである。「因循姑息な精神」とは相手を理解しようとしないうかさに加えて、世間に流通する、つまらぬ名誉がどうだとかどちらがえらいだとか、体面にかかわるような、＜聖なるもの＞を認めない俗っぽい世間的価値を指している（質屋はじっさい、体面によって連隊を追放され、体面を保とうとしてクロトカヤと結婚したのだ）。自分はこの世間的価値を信じて従っただけで、こんな事態になることは予想していなかったというわけだ。つまり、質屋は自分が彼女を「苦しめた」ことを認めながらも、同時にその責任を自身に指針を与えつづけた「人々」に

転嫁しようとしているのである。今は質屋で将校ではないのに、裁判官に将校と呼ばせているのは、相も変らぬ自身の美化であり、その延長上に、責任のすり替えがある。だからこそつづけて、「自分がどんな樂園でもっておまえを取り囲もうとしていたか、わかるまい」という傲慢な言葉も吐けるのだし、今なら「ちょっと見ただけで、すべてをわかってくれるだろう」などと、図々しく言えもするのである。

ただ読者からすれば、違ったものが見えてくる。読者にとっては、質屋が責任逃れをしていることよりも、質屋の信じた世間的価値、自分たちも感染しているかもしれない「因循姑息な精神」のほうがはるかに切実である。

よく知られているように、『おとなしい女』という小説は、モスクワ出身のマリヤ・ボリーソワという貧しいお針子が、アパートの最上階の窓から飛び降り自殺をはかったことに想を得ている。住民たちの目撃によると、「ボリーソワは二枚のガラスを割ると、足から屋根に這い出て十字を切り、両手に聖像をもって身を投げた。その聖像は聖母マリアをかたどったもので、彼女の両親の祝福のしるしであった。ボリーソワは人事不省の状態ですり起きられ、病院に運ばれたが、数分後に死んだ²¹」。この新聞記事を読んだドストエフスキイがなにより驚いたのは、自殺者が聖像を抱いていたことである。彼女は「神様がお望みにならない」からといって祈りを捧げて死んでゆく。一見、単純に見えるが、ドストエフスキイはこの「おとなしい」自殺について長い間考えをやめられず、まるで自分に罪があるような思いに駆られる²²。自分がボリーソワを死に追いやった<罪ある世界>の一員と感じたドストエフスキイは、『おとなしい女』の読者にもクロトカヤの自殺に責任があると感じさせるように、チャンネルを合わせているのだ。

さて、質屋は責任を「人々」に転嫁したが、それで彼に平安が訪れたわけではない。彼は地下室人が戻っていったような古巣は

もはやない。なるほど、すべてはこんなもので、だから改心するにはあたらぬという地下室人の「確信」からは解放されたけれども²³、代わりに烈しい孤独感に苛まれることになる。そして誇張癖のある彼は、この孤独感を全人類規模で敷衍する。

「因循姑息な精神よ！ おお、自然よ。地上の人間たちはみな 独りぼっちだ — これが災いなんだ！（…）太陽は宇宙に生気を与えると。太陽が昇ったら、それを見てもいい。はたしてそれは死んでいないか？ 何もかもが死んでいる、いたるところ死人だらけだ。独りひとりのばらばらな人間がいるだけで、その周りは沈黙 — これが地上だ！ 『人々よ、互いに愛し合いなさい』 — これを言ったのは誰だ？ これは誰の遺訓だ？ 時計の針はカチカチと無感覚に、いやな音をたてている。夜中の2時。彼女のちっちゃな靴が寝台のそばにある、まるで彼女を待っているかのようだ……いや、ほんとうのところ、彼女が明日、運ばれて いったら、わたしはどうしよう？」

この「因循姑息な精神 *косность*」とは、先ほどと同じものを意味するのだろうか。そういえば、さらに少し前では、彼女が死んだのは *косный случай*（「変わりばえのせぬ偶然」）のせいだと語っていた。*косность*（あるいは *косный*）は、どうも質屋の好んで使う言葉のようだが、その使い方は微妙に違ってきているのではないか。最後の「因循姑息な精神」は、明らかに前回より抽象度が増している。それは、ここでは「自然 *природа*」の反意語として、人間の社会に孤独を呼び込む根源、あるいは、人を愛さないようにさせている根源として示されている。人を見下す傲慢さ、暴力、人を素材にした愛の「空想」、あるいは相手を見下した自分勝手な愛の「意識」、あるいはそのなかに潜む「嘘」にまで意味は拡大してゆく。人が人を愛するのが「自然」であれば、それはまさに不自然な精神である。質屋にとってこの言葉は、クロトカヤ

のいない孤独感を誇張しただけかもしれないが、ここまで物語を読みすすめてきた読者の側からみれば、クロトカヤが死んでゆく、まさにその根本原因を示すものとして読みとれる。この最後の「因循姑息 *косность*」は、『おとなしい女』という物語全体の意味を一語の中に吸い込んでいるのだと言っても過言ではない。

すでに触れたように、ドストエフスキイは「作者から」と題した序文の中で、回想が質屋を否応なしに「真実」へと至らしめると述べている。これが彼の考えるテーマだった。しかし、その真実とは「彼自身にとって」という留保付きのものである。自分が彼女を苦しめたのだと意識する、— おそらくはこれ以上のことをドストエフスキイは語っていない。クロトカヤを苦しめたと認識できたとしても、それで質屋自身は罪の意識を感じているかという、明らかに否である。誰もが同じだ、という地下室人の「確信」からは逃れたものの、彼は最後まで責任を回避しようとしており、結果的に改心できないままにいる。

質屋はクロトカヤと結婚する前に、自分をメフィストフェレスになぞらえてクロトカヤにこう言っている。「自分は悪をなさんと欲して善をなす全体の部分の部分なんでね……」。おどけながらも、質屋はやはりこの言葉を自分にあてはまると考えていたのだ。「愛する女性」育成計画の非人間性は、彼も承知していた。ここが問題なのだ。承知していたにもかかわらず、結果よければすべて良しで、自分は最終的にはクロトカヤを「楽園」で取り囲むことになるのだからと、質屋はどんな辛い状況に彼女を陥れても許されるのだと平然と構えていた。しかし、辛さに耐えきれず相手が死んでしまふとなれば、話は違う。遠い空想の未来が、もはや実現する時が来るといふ可能性がなくなった今、質屋は自分の行為そのものの意味を考えざるをえない。面白いことに、ドストエフスキイ自身はあるところで人間のさがを、メフィストフェレスの言葉をもじった文章で表現している。—「わたしはつねに善を希求し熱望しながらも、行為の結果として悪しかもたらさない全体の

部分の部分なのだ²⁴」。おそらくこれが質屋の実体であり、クロトカヤがさまざまな傲岸な「問い質し」によって得た結論ではなかったか。行為が善意に発している、その善意を信じきっている人間の嘘に彼女はどうしてもなじめなかった。またクロトカヤ自身が自殺まで追い込まれたという事実そのものがまた、「悪しかもたらさない」という言葉の裏づけになる。

ただ、クロトカヤの味わう心中の苦しみは、質屋の回想にはゆがんだ形でしか反映されない。なぜクロトカヤが自殺しなければならなかったか、その苦しみは、質屋の意図とは離れたところ、すなわち作者 - 読者のチャンネルを通じて洞察するしかない。われわれ読者は、想像力を働かせてクロトカヤ像を再構成しなければならないのだ。それが「おとなしい女（クロトカヤ）」という題が選ばれたゆえんであろう。

注

- 1 河上徹太郎『わがドストイェフスキー』河出書房新社、1977年、212頁。
- 2 「おとなしい女」も質屋も固有名は示されていない。
- 3 Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.24. Л., 1982. Стр.321. (以下、本全集は『ドストエフスキー 30巻全集』と略記する。)
- 4 『おとなしい女』からの引用は、『ドストエフスキー 30巻全集』第24巻(5-35頁)による。頁数は煩瑣を避けるため省略する。
- 5 ヴラヂーミル・ジダーノフ、鈴木淳一訳「ローセフのシンボル論とドストエフスキーの短編『おとなしい女』」(木下豊房・安藤厚編『論集・ドストエフスキーと現代』多賀出版、2001年、所収)、203頁。強調は筆者のもの。以下同じ。
- 6 『ドストエフスキー 30巻全集』第23巻、26頁。当時の若い自殺者に対するドストエフスキーの態度については、次の拙稿を参照されたい。「ドストエフスキーと自殺—『おかしな男の夢』を中心に」(海上保安大学校「研究報告」第51巻第1号、2005年)。
- 7 同上、35頁。
- 8 暴力が原理として倫理的であるかどうかという問題に決着をつけるためには、ベンヤミンの言うように、「目的を度外視して、手段そのものの圏内で区別をつけることが、できなくてはならない」(ベンヤミン、野村修訳『暴力批判論』、岩波文庫、1994年、30頁)。
- 9 エマニュエル・レヴィナス、熊野純彦訳『全体性と無限』、岩波文庫(上)、2005年、14-15頁。続けてレヴィナスは言う。「きずなばかりか、ひとびと

のそれぞれに固有な実体を裏切らせ、行為の可能性のいっさいを破壊してしまうにいたるような行為を遂行させるところに、暴力が存在するのである」(同頁)と。

- ¹⁰ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 24 卷、332 頁を参照。
- ¹¹ 「人生の舞台 *поприще*」という質屋の美化された言葉を、クロトカヤは「場所 *место*」というありふれた言葉に直し、「すばやい、感情のこもったまなざしで」質屋を見ながら、こう応じている。「もちろん、どんな場所でもよいことはできます」。そしてさらに「ほんとうにどんな場所でも」と、同じ言葉を繰り返しさえしている。— いかにも彼女が率直に、飾らぬ思いで、強く善を希求していたかがわかる場面である。ここでも目が誇り高い彼女を特徴づけていることに注意したい。
- ¹² クロトカヤに名前が与えられていないのは、この<奴隷状態>と関係するのだろう。
- ¹³ この意味で、ドストエフスキイは「しんじつ美しい女性を描きたくてクロトカヤにかかったのではないか」という内村剛介氏の指摘は興味深い。ただ、氏は「善良」で「もの言わぬ存在」がドストエフスキイの理想的女性像であったと考えている(内村剛介、石田敏治、井桁貞義「鼎談 クロトカヤとは誰か」—「パイディア(ドストエフスキー特集)」季刊 16 号、竹内書店、1973 年、87—89 頁)。わたしに言わせれば、「潔癖さ」とそれに由来する「問い質しと抗議」こそが、ドストエフスキイの「しんじつ美しい女性」を特徴づけるものであった。
- ¹⁴ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 17 卷、9 頁。
- ¹⁵ 記憶は<突然、なんということもないのに>甦ってくる。『死の家の記録』、『地下室の手記』、『永遠の夫』、『百姓マレイ』、『イッポリートの告白』(『白痴』)などで扱われるのはみな、この自身の力ではどうにもならない記憶である。
- ¹⁶ 質屋が「スロヴォイェルス」を自覚して用いていることは、クロトカヤが彼のプロポーズにすぐに返事をせず、思案を重ねたことをふり返る場面からも分かる。彼は、「さあ、どうですか」と尋ねかけたが、「自分を抑えられずに、変にきどって、『さあ、いかがでございますかな Ну что же-с』とスロヴォイェルスを付けて問いを發した」。
- ¹⁷ 自らを<不特定多数>の一人だと見なす質屋や地下室人に固有名がないのは暗示的である。
- ¹⁸ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 5 卷、178—179 頁。
- ¹⁹ 前出、「ローセフのシンボル論とドストエフスキーの短編『おとなしい女』」、202—203 頁。
- ²⁰ 「(…)わたしが毎晩訪ねてゆくと、夢中になってわたしを迎え、少女の頃のこと、幼年時代のこと、両親の家のこと、父のこと母のことすべてを、子どもっぽい調子で(魅力的な邪気のない子どもっぽさで!)話して聞かせるのだった」。
- ²¹ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 23 卷、381 頁。
- ²² 同上、146 頁。
- ²³ См.: Поддубная Р.Н. Герой и его литературное развитие(Отражение «Выстрела» Пушкина в творчестве Достоевского) — В кн.: Достоевский. Материалы и исследования (3). Л. 1978. Стр.65.
- ²⁴ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 24 卷、287—288 頁。